

# PRESS COLLECTIVE

— SPRING 2018 —

collective vol.44

21th April 2018

@event space 雲州堂



http://collective-music.com/

edit: tawaki text: tawaki, 楠田行展, Itaru Wakui, mackiart design: yukiokimura.com special thanks: DJ TOCCHI

## DJ TOCCHI インタビュー

今回のゲストのTOCCHIさんはニューヨークでクラブカルチャーの洗礼を受けたDJ。日米のクラブシーンに関する貴重な「証言」をお楽しみください。

— NYに行く経緯を教えてください。

北海道出身で、卒業後に札幌に出て、そこでNORIちゃんHEYTA、YAKKO、TOKちゃんを知り合ってクラブで遊ぶようになった。1983年にNORIちゃんがPARADISE GARAGE (以下、PG) に行っていて、「NYにかっこいいクラブがあるぜ」と教えてくれて。当時、「東京で暮らそうと思ってたけど、結局25歳の時にNYに行くことになったんだよ。わりと軽いノリで(笑)。」

— DJの基礎を築かれたNYでの経験を教えてください。

NYには2回に分けて行って、最初は1986年から1989年の時にはまだDJはしていません。この時にはまだDJはしていません。て、クラブやレ「屋」に足繁く通っていたんだよ。靴一つで行って、まとも英語を喋れなかったんだけど、日本食レストランなんか「働かせてくれ」って片っ端から電話して。最初に就いた仕事は弁当屋さん。でも朝の3時から仕事でクラブに行けないから1週間で辞めたなあ(笑)。

— 実際に体験したPGはどんな感じでしたか？

3000人収容の体育館のような広さのところ。天井もすごく高かった。DJブースの横のVIPルームだけでも100人ぐらいいる大箱だったよ。週2回やっていて、金曜日はストリート、土曜日はゲイナイト。「ARK」はムラッ気があったんだけど調子がよければ両日とも1人でDJしていたよ。PGの近くにはVINYLMANIAというレコ屋があって、パーティ後はみんなそこに行っていて、かかっていたレコードを買って帰って流れてね。

— 帰国後はどんな生活を？

帰国後2年間は札幌に戻っていて、WALLという伝説的なクラブで週に1回DJしていたんだよ。当時はDJの仕事しかしていないけど、十分稼げた。バブル真っ盛りだったからね。1992年にLARRY「EVAN」が日本にツアーで回っていて、その最終地がWALLだったんだけど、かなり体調が悪そうだった。「またニューヨークで会おう」と約束したんだけど、2ヶ月後に死んでしまった。ちなみにLOFTのDAVID MANCUSOは、LARRYの葬式で初めて知り合ったんだよ。

— LOFTはどんな所でしたか？

「LOFTは商業的でなくファミリイって感じだね。フードも置いてあって自由に食べれて。「LOFTはメンバー制で、紹介がないと入れない仕組みになっていたんだけど、僕はNORIちゃんの紹介でメンバーカードをもらって。メンバーとしても、お金がかかるわけではな。ちなみに札幌のPRECIOUS HALL、

HAKATA、旭川のBASEMENTにはフリーフードがあるけど、これは「LOFTの流れなんだよ。」

— TOCCHIさんはLOFTでDJを？

「いやいや(笑)。自分はイーストビレッジにあるSOOPというバーでDJをやるようになったんだよ。あと高橋透の『DJバカ一代』でも紹介されているフジヤマ・ママというヤッピー向けの寿司屋さんで月に3回、DJをやっていたよ。」

— フジヤマ・ママで寿司握っていたんですか？

「いやいや(笑)。普段はそこは別の日本食レストランでウェイターをしていた。当時は物価も安かったし、チップだけでも良い稼ぎになったよ。」

— TOCCHIさんのDJスタイルの特徴を教えてください。

「ミックスは好きだけど、日本人的にBPMを丁寧に合わせてはあんまりしない。日本人のDJは結構BPMを気にするでしょ。僕はむしろ、「次は何が来るんだ？」ってワクワク感が好き。BPMを気にせずグイグイいく。これはLARRYのスタイルの特徴でもあるな。」

— 生き物が暴れているみたいなの？

「そうそう(笑)。決して「下手くそ」ということではなく、バタバタした感じはワクワクするでしょ。」

— 現在の居住地である大阪では、どんな活動を？

1999年にNYから帰国して、大阪に暮らすようになってからAMAMIYA TATSUROWとかJOLEEやUNDER LOUNGEやDJとしていたよ。でも、今、拠点といえる場所は天下茶屋のMODEというイベントだね。

— MODEの開催場所はどんなところですか？

「天下茶屋の民家でやっているんだけど、あそこは特別な場所。「OFF」と同じクリプシュのスピーカーを贅沢に使っている。ターンテーブルもアンプもすごく良いのを使っている、音がめちゃくちゃクリア。MODEでは自分もDJするけど、いつもUNDERFLOWが良いレコードかけているから、踊っていることの方が多いな。」

— TOCCHIさんのダンスは人を元気にしますよね。還暦前の人とは思えません。

「ダンスで音を表現しているんだよ。みんなに元気を与えている。僕のモットーは「人に元気に与える」「一緒に楽しむ」だね。」

— 最近はどうなレコードを買いますか？

「ハウスが多いかな。何年経っても使えるハウス。でも今は犬を3匹飼っていて、そっちに随分お金がかかるから、年間に数枚しか買わない(笑)。MODEに行ったら、良い音源がいっぱい聴けるからね。」



犬の散歩をする DJ TOCCHI

(インタビュー/楠田行展、yur、tawaki)

# 備忘録 夢の街跡 第10回 「松江を歩く」

楠田行展



現在の伊勢宮町。往時を偲ばせる料亭、松江巴庵(右)は元妓楼の「米江」を改築している

代の昭和30(1955)年頃には、60軒の特殊飲食店に250人の従業員がいたようです(『全国女性街ガイド』)。

当日の仕事は大手ガス会社が開いた新年会の取材。懇親会では(ノーマル)コンパニオンが出席者にお酌していました。「割子蕎麦を指し」本当は「わりご」って濁って発音するんですよ。」談笑していたベテラン社員からは「歓楽街は伊勢宮町と東本町の2カ所。コンパニオンは歓楽街のホステスでこの後、彼女たちに引張られて店で二次会」との興味深い情報を得られました。

島根の県庁所在地である松江市は人口20万3600人を擁する山陰地方最大の都市です。市街地は、西側の宍道湖と東にある中海(なかうみ)の2つの湖に挟まれた水の都。広島支局から取材の代打要請を受け、訪問したのは1月12日のこと。大阪から高速バスに乗り4時間半で着いたJR松江駅前には8センチの雪が積もっていました。

入手したデータによれば明治30(1897)年、県内には松江伊勢宮町など7カ所の貸座敷免許地があったそうです。今回、仕事ついでに訪れた伊勢宮には当時、26軒の遊廓があり、昭和5(1930)年発行の『全国遊廓案内』には百々家、平尾、舟木、米江など38軒の妓楼の記載がありました。赤線時

## Book Review ティム・ローレンス 『ラブ・セイヴス・ザ・デイ』 (スペースシャワーネットワーク2008年)

Itaru Wakui



今回のゲストT.O.C.E.さんの紹介に「D」NORの紹介で「OFTのメンバーに」とありますが、このザ・ロフトについてはティム・ローレンス『ラブ・セイヴス・ザ・デイ』——究極のD/R/クラブカルチャー史——というとてもよい本がありますのでこれを参照してご紹介したいと思います。

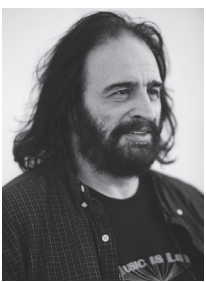
この本は書名の通り70年代という黎明期のNYのディスコ/クラブシーンについて、多くの当事者への聞き取りをふまえてつづられた労作です。

惜しくも2016年に亡くなったロフトの主催者デイヴィッド・マンキューソンは1944年10月20日生まれ。誕生わずか10日後には児童養護施設に引き取られるもその後は母親との生活を送り、18歳からNYでの生活をスタートさせます。

製造業の工場が移転し広々としたロフト式建てものが貸しにだされ

ていた当時、そうした一角に越して来たマンキューソンは1966年に自分の住む部屋でパーティを開きます。これこそがロフトのはじまりです。ただしマンキューソンはとくにパーティに名前をつけておらず、その住まいがロフト式の建てもなかったため次第にロフトと呼ばれるようになったといいます。いったんの休止を経てこのパーティを再開させるにあたりマンキューソンは手作りの招待状を送ることにし、招待状に「Love Saves the Day」と記します。以降もパーティには誰かに招待されないというルールがもたらされ、客はひとりしか同行者を連れて行けないというルールがもうけられました。とってつけて排他的・特権的な場だったわけでなく、むしろ「この世にはいろんな人たちがいる」というマンキューソンの考えから階級、肌の色、性別、性的志向を問わない客層が集まる場となり、そのD/Rや圧倒的な高音質に魅了された多くの信奉者を生み出したのです。

マンキューソンは亡くなってしまいましたがそのスピリットはさまざまなおところで継承されておりCollectiveもそのひとつといえるでしょう。



David Mancuso (1944 - 2016)  
(<http://www.timlawrence.info/>より引用)

## Music Review King / We Are King



label: KING CREATIVE (2016)

黒人女性3人組のアーティストです。未来形の新しいソウルミュージックで、アルバム総じて良いのですが、特に「The greatest」という曲が気に入っています。この季節ドライブミュージックに。

## Paolo Modugno /

Brise D'automne



label: ARCHEO RECORDINGS (2017)

イタリアの民族音楽研究家だそう。詳しくは知りませんが、最近Gigi MasinやGaussian Curveなどもよく聞いてます。仕事中でも家でもゆとりある時間にしていくので気に入っています。

(mackiant)